

昨年6月、EU（ヨーロッパ連合）から離脱するかどうかを問う国民投票がイギリスで実施されました。最終的に離脱派が残留派を上回る結果となり、今年3月、イギリスはEUに対して正式に離脱を通知しました。イギリスのEU離脱をめぐっては、このような投票結果となった原因や、イギリスとEUの行方、日本経済や世界経済への影響など、さまざまな視点から議論が展開されています。今回は、世界経済の中のイギリスという視点から、産業

## 世界経済の中のイギリス

18世紀後半から19世紀前半にかけて世界で最初に産業革命を経験したイギリスは、「世界の工場」として綿製品などをきかんに輸出するようになりました。また、首都ロンドンにシティという地区がありますが、ここにイギリスだけでなく海外からも多くの専門的な金融業者が集まり、金融・サービス業の中心地となりました。イギリスの通貨ポンドは金との兌換（たかん）性を保証され、国際金本位制における基軸通貨としての役割を果たすようになりました。イギリスは「世界の銀行家」としての地位も確立したのです。

しかし19世紀後半には、イギリス以外の国においても工業化が進展し始めました。特にドイツとアメリカでは、重工業の発展がめざましく、両国は鉄鋼生産などの分野でイギリスを追い抜きました。イギリスは「世界の工場」の地位から転落し、三大工業国のひとつとなりましたが、「世界の銀行家」としての地位は20世紀初頭まで維持していました。19世紀後半のイギリスの国際收支構造をみると、貿易赤字を海運料や利子・配当収入などの貿易外収支の黒字によって相殺するという構造になっていました。

# グローバル化

## 推進役としての歴史

革命以降イギリスがたどった歴史の一端を、主に経済的側面に注目して概観したいと思います。



名古屋大学大学院  
経済学研究科准教授

木谷 名都子

化、海底ケーブルの敷設を通じて、国際的な交通ネットワークや通信ネットワークの形成が進みました。海底ケーブルの大半はイギリスの会社によって所有されており、国際的な通信ネットワークを通してロンドンには最新の情報が集まるようになりました。19世紀にはヒト・モノ・カネ・情報の移動が活発になりましたが、この時代のイギリスは世界経済の中心としてグローバル化を推進する役割を果たしていたといえます。

かつてグローバル化の中心にいたイギリスがこれからのような道を歩むのか、イギリスとEUが今後どのような経済関係を構築していくのか、注目したいと思います。

きたに なつこ 外国経済史。大阪外国語大学（現大阪大学外国語学部）大学院言語社会研究科博士後期課程言語社会専攻修了。博士（学術）。1974年生まれ。

